いのちの海と空と大地



原発のない世界を求めて　ニュースレター

発行：　日本聖公会「正義と平和委員会」原発問題プロジェクト

ホームページ　https://www.nskk.org/province/no-nuke-project/

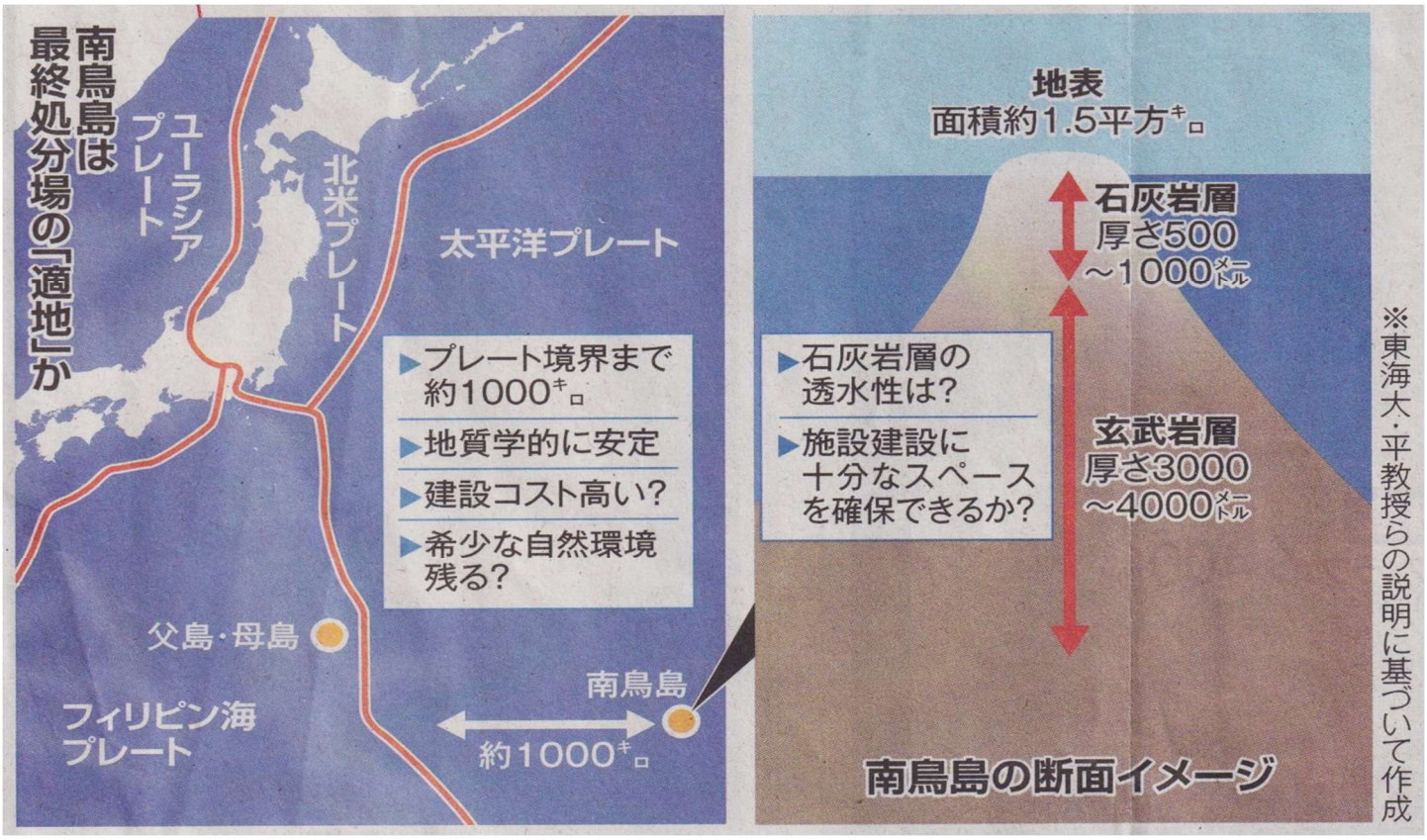
「核のごみ」どこへ　南鳥島の文献調査始まる

南鳥島（東京都小笠原村に属す）は、東京から南東に約 1,900km に位置する面積約 1.5 ㎢の小さな島である。政府は本年 3 月、この島に高レベル放射性廃棄物（ガラス固化体、核のごみ）の最終処分場選定に向けて、文献調査の実施を申し入れた。これまで、自治体の手挙げ方式に依存して候補地を探ってきたが、国策として進められてきた原発の使用済み核燃料の最終処分場を自治体の判断によって受け入れを決めることは、その判断の重さから困難とする意見が出されており、方針の見直しが求められていた。選定プロセスの第 1 段階である文献調査を受け入れることにより、20 億円の交付金が支給されるが、手を挙げる自治体は、自ら喜んで応募するというより、苦しい自治体財政の助けを期待しての判断であったと言える。しかし、これまで受け入れた自治体は人口も 5 千人以下の財政的にも苦しく、地域活性化に困難を抱える状況の中で受け入れであった。

それに加えて、「核のごみ」は使用済核燃料を扱うものであるから、深地層処分とはいえ、その安全性に関する判断が賛否両論に分れ、地域住民の中に深刻な分断が生じ、その首長が苦しい立場に立たされるという状況があった。このような中での受け入れ判断につき、小笠原村の渋谷正明村長は北海道新聞社のインタビューに答え、「現状、原発は必要だし、処分場もどこかに要る。適性のある島との見方があるなら、文献調査は受け入れてもいいと考えました。だけど、多様な意見がある以上、手放しで『どうぞ』とは言えなかった。――中略――条件付きの回答ができると分かれば、他の自治体も調査を受け入れやすくなるのではと勝手な願いも込めています。」と答えている。自治体の首長には「責任を負う辛さや負担」がある。「処分場選定のハードルだと思います」

性急な判断はせず、可能な限り知識や情報をもとに議論を重ねて、住民の納得のもと結論を出したいという姿勢を強調した。そして国が他の自治体にも申し入れをするまでは、次の概要調査について意見を示さない方針という。結論を急がず、しかし、しっかりと深めて積み重ねてゆこうとする姿勢である。あくまでも住民の理解の深まりを大切にしようとする姿勢に好感を持てる。

同紙には、南鳥島に関して地質学の専門家の意見についても掲載している。



北海道新聞 7 月 26 日朝刊より

東海大海洋研究所の平朝彦教授

「日本で最も地質が安定し、地層処分に好条件の場所」

島の地質は溶岩由来の玄武岩が 3 千～4 千 m 積み重なった上に、珊瑚礁由来の石灰岩が 500m~1,000m にわたって堆積していると推定される。

NUMO（原子力発電環境整備機構）関係者

石灰岩は一般的に水を通しやすいことから、玄武岩層まで深く掘らなければいけない可能性が「課題になり得る」

北海道大学大学院工学研究院の小崎完教授（廃炉、放射性廃棄物処分）

容器や粘土の厚さを増すなど工夫すれば「石灰岩層への処分自体は実現の可能性がある」

透水性が高いと掘った穴に水が溜まりやすく、工事の難易度が増す可能性がある。

小笠原村の住民の声　　NPO 法人小笠原自然文化研究所

「文献調査の間に村独自で（野生生物やその保全に関する）調査をすべき」

「自然環境への配慮が置き去りになる」

火山活動が終焉してから数千万年経っており、地震の起きやすいプレート境界までは約千 km。活断層も異常高圧層も無い。しかし、周辺海域でレアアース（希土類）開発を進め、島内に陸上自衛隊の射撃場もできた。このような国策との両立も検討課題となる。

国が小笠原村に申し入れたとは言え、検討課題の多さに圧倒される。今後の調査がどのように進展するのか見守っていきたい。